

TOKYO●2020
CANDIDATE CITY

成田 真由美 氏

東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会理事。水泳にて、パラリンピック4大会連続出場。金15、銀3、銅2、計20個のメダルを獲得。

2020年、東京でかなえたい
大きな夢

新年あけましておめでとうございます。

皆さんは新年に何を思われたでしょうか。私はもちろん、2020年、東京にオリンピック・パラリンピック招致の成功を願い新年を迎えました。9月7日、ブエノスアイレスでのIOC総会で開催地が決定します。招致活動ができる時間は約8カ月となりました。

東京招致において一番の課題は「支持率」です。現在7割近くの支持をいただいておりますが、これは昨年のロンドンオリンピック・パラリンピックの影響も大きいかと思います。私は16年ぶりに選手ではなく、「観客」としてロンドンを見たのですが、周りの人たちが選手たちの活躍や成績に一喜一憂をしている姿を見てとても新鮮に感じました。スポーツってすごいんだな、ってあらためて実感しました。

招致活動をしていると、ときどき「パラリンピックを間近で見たい」と言ってくる方がいます。それはうれしいことです。選手たちが本番で力を出し切るための大事な条件の中に、間違いなく「応援」があるからです。外国開催のパラリンピックしか私は経験がありませんが、開催国の応援はものすごいのです。隣の人の声が聞こえないくらいです。それが東京で実現したら、そう思うだけで興奮します。

ただ、私が東京招致を切望するのは、選

手だけのためではありません。多くの人にとって優しい町になるため、東京のバリアフリー化の徹底のためです。これまでのオリンピック・パラリンピック開催国のバリアフリー化は、それは素晴らしい限りです。私も自分が障害者であることを忘れるくらい、移動などもとてもスムーズです。

しかし、日本は先進国でありながら、バリアフリー化に関しては十分ではありません。首都東京でさえ、駅などの公共施設で不便を感じている方は多いと思います。それはハード（設備）だけではなく、ソフト（皆さんの認識）においても同様です。

オリンピック・パラリンピックでは大勢のボランティアがお手伝いをしてくれます。彼らのお手伝いがなければ、おそらく大会は成り立たないでしょう。

招致が実現すれば、彼ら自身何ものにも替え難い経験をするようになります。世界中からのゲストに接する機会を得るのです。特にパラリンピック関連であれば障害者と接する機会を得ます。声の掛け方、手の添え方、また過剰なお手伝いをせずに見守るということを体験できます。何に困り、何が不自由なのかを実感できます。知ってしまえば何でもないことですが、それを「知る」までが、実はとても遠い道なのです。

ボランティアを通して大きな体験をする若者が増えたら、どれだけ素晴らしい日本になるのでしょうか。ハード面も重要ですが、ソフト面の成長を私はこの2020東京招致に期待しています。

本物に接し体験する。そこから目標や夢を見つける人もいます。この体験こそが、最高の教育ではないでしょうか。若者だけでなく、老若男女みんなにとって……。

CANDIDATE CITY

2020年オリンピック・パラリンピック開催都市として東京が名乗りを上げています。国際大会の招致は日本の存在をアピールする機会になると同時に、さまざまな経済効果が期待されます。このコーナーでは、会員あるいはゲストの方にそれぞれの立場と視点から、オリンピック・パラリンピックがもたらす効果について寄稿いただきます。